

5-2 世界の諸宗教 <標準編>

宗教の分類

世界に存在するさまざまな宗教は、**一神教**か**多神教**かに大別することができる。一神教は唯一全能の神を崇拝する宗教で、ユダヤ教・キリスト教・イスラム教が代表的なものである。これに対して多神教は複数の神を崇拝する宗教で、古代エジプトや古代ギリシアの宗教や仏教が代表的なものである。【①】

また**普遍宗教**と**民族宗教**という分け方もある。普遍宗教は時代や民族を越えてあらゆる人間が信仰できる性質をもつ宗教であり、いっぽう民族宗教は特定の民族の利益に深くむすびついている宗教をいう。代表的な普遍宗教にはキリスト教・イスラム教・仏教があり、ユダヤ教や日本の神道は民族宗教に分類される。

キリスト教

キリスト教は、ユダヤ民族の宗教であるユダヤ教から分離発展した一神教の普遍宗教である。紀元 30 年ごろ現在のパレスチナ地方（当時はローマ帝国の支配下にあった）にいた**イエス**という人物によって創始された。

イエスは、当時のユダヤ民族の貧しい人々が「**律法**」と呼ばれる厳しい戒律によって束縛され苦しめられていたことや【②】ユダヤ民族が他民族と激しく敵対していたことを悲しみ、厳しい束縛として律法を用いるのは誤りであり、ほんらい律法は人間の幸福のために存在すること、神はすべての人々を人間として愛しており（**神の愛**）、人間は神の愛を受け入れて敵味方の隔てなく互いに愛し合う（**隣人愛**）ことが大切だと説き、民衆の側に立って当時のユダヤ教の指導者の腐敗した態度を批判した。

しかしイエスは、ユダヤ教の指導者や保守的な人々によって危険人物として訴えられ、十字架で処刑されてしまった。これに対してイエスの弟子たちは、イエスこそ**救世主**（キリスト）【③】であったと信じ、イエスの言行を神聖なものとして崇拝するよう呼びかけ始めた。やがて皇帝の迫害にもかかわらず、ローマ帝国内に信仰者が広まり、やがてキリスト教（**ローマ＝カトリック教会**）として確立していった。

キリスト教は、古代から中世にかけてヨーロッパに普及し、ヨーロッパの思想や文化に大きな影響を残した。しかし 16 世紀にローマカトリック教会の腐敗をきっかけに**宗教改革**の大運動が起こり、その過程で生まれた**プロテスタント教会**は、西欧各国で興隆しつつあった市民階級に広く受け入れられ、やがて 17～18 世紀の市民革命を導くことになった。

①一神教の神は人間とは隔絶し巨大な力をもった存在としてイメージされるのに対して、多神教の神は人間に近い存在としてイメージされることが多い。

②律法は、紀元前 13 世紀に古代エジプトの下層民を救出した際（出エジプト）の指導者**モーセ**が神から授かった「**十戒**」に由来する。

もともとは信仰と社会生活における基本的な態度を規定したものであったが、時代が下るにつれて次第に詳細かつ厳格な規範となり、イエスの時代には権力者たちが民衆にその厳守を命じるようになっていた。

③「キリスト」という言葉は、ギリシア語で「救世主」のことであり、人名ではない。

イスラム教

イスラム教は、7世紀にアラビアのムハンマドによって創始された一神教の普遍宗教である。

イスラム教は、神（**アラー**）の前での人間の徹底的な**平等**を実現しようとする姿勢に貫かれている。特に富む者が貧しい者に向かっておごり高ぶる態度をとることに對しては否定的であり、貧しい者への寄付（**寄捨**）が宗教的義務である。また禁欲月（**ラマダン**）の期間中は、妊婦などを除いて日中の飲食が禁じられるが、これも貧しい者の苦しみを自分自身の空腹感を通して味わい理解するためである。イスラム信徒（**ムスリム**）が毎日5回**メッカ**（イスラム教の聖地）の方角に向かって**祈り**をささげるのも、性別・貧富・能力など一切の人間的な差異を越えて、一個の人間として巨大な神の前に立ち、自らを省みるためである。【④】

イスラムの教えは、ムハンマドの死後しばらくして宗教的指導者の後継争いからスンニ派とシーア派に分かれていった。

現在、多くのイスラム諸国がアメリカに対して批判的な姿勢をとる理由のひとつには、経済的不平等を正そうとするイスラムの立場からは、世界の資本主義経済大国として君臨するアメリカが“おごり高ぶる富者”に見えるという事情が関係していると言えるだろう。

仏教

仏教は、紀元前5世紀ごろ古代インドのシャカ族の王子ゴータマ・シッダルタによって創始された多神教の普遍宗教である。

ゴータマ・シッダルタは、「あらゆるものは相互に依存しあっており孤立するものは何もない」という真理（**縁起の理法**）を説き、「この世にあるすべての事物は変化し（諸行無常）、何ひとつとして不変のものはない（諸法無我）」という理法を悟れば、人生における苦しみ（**四苦**=生・老・病・死など）を克服して（救い）、平安な境地（**涅槃**）に至ることができる」と説いた。仏教において「**ブッダ**」とはこの真理を悟った者のことであり、ゴータマ・シッダルタのみならず誰でもブッダになることができる。そしてブッダとなった者は、すべて生命あるものに対する深い思いやり（**慈悲**）をもつようになるとされる。

ゴータマ・シッダルタの死後、仏教の教えは、個人の救いに重点を置く**上座部仏教**と（東南アジア方面に伝播）、社会大衆の救済に重点を置く**大乘仏教**（中国・朝鮮・日本に伝播）に大きく分かれて、それぞれ発展していった。日本では、仏教ははじめ**国家安泰**のための祈禱【⑤】として取り入れられ平安時代にかけて発展したが、鎌倉時代になると**末法思想**の影響の下で民衆の救済を主眼とする宗派が相次いで生まれていった【⑥】。

④そしてこのようなイスラム教徒の姿勢に敵対的な存在から信仰を守る手段として聖戦（**ジハード**）が正当化されている。

⑤空海が開いた真言宗、最澄の天台宗など平安時代までの仏教は朝廷の保護を受けて発展した。

⑥法然の浄土宗、親鸞の浄土真宗、日蓮の日蓮宗などがあり、朝廷の保護を受けず直接民衆に布教していった。